View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

2016年
6月21日
火曜日

「良き社会」の構想者としての経済学徒

久保　真　教授（経済学史）

私は、十八世紀から十九世紀の西欧で、経済学という学問が産声を上げてよちよち歩きを始めた頃のことを研究しています。十八世紀から十九世紀といえば、アメリカ独立やフランス革命といったそれこそ世界史的な大事件が次々と起こるのですが、黎明期の経済学は、当時の国際的・国内的な政治状況に対応しつつ、また他方でそうした政治状況に一部影響を与えつつ、育まれていきました。経済と政治との関係や理念の組み合わせは極めて多様であったわけですが、だからこそその関係は常に緊張を孕んだものとなりました。当時の経済学者たちはまず何よりも「良き社会」を構想するいわば「社会哲学者」と言うべき存在だったのです。

実は、現代の経済学者たちも、のっぺりした無色透明な人たちではありません。例えば、ノーベル賞受賞者であり日本でも有名なスティグリッツやクルーグマンは、アメリカではリベラル派を代表する経済学者です。他方、皆さんも使っている教科書を執筆したマンキューという人は、保守派、共和党系の経済学者として知られています。実際、マンキュー自身、次のように言っています。「経済学者が、本当は隠しておきたい秘密をお教えしよう。［経済学者は、］経済学者としてだけでなく、政治哲学者としても話をしているのだ。つまりは、世界の仕組についての理解だけを基に提言を行っているのではなく、どうすればよい社会を築けるかという自らの判断もそこに加えている」のです。が、これが「隠しておきたい」ほど不都合な真実であるのはなぜか？　マンキュー自身も教科書ではそうしているように、経済学は科学なのだ、理論とデータに基づいた全く客観的な学問なのだ、と初学者たちに繰り返し語っているにも関わらず、実際は、自らを含め経済学者は「良き社会」を構想し、主観的な判断も厭わず下す「哲学者」でもあるからでしょう。でも、私に言わせれば、これは不都合な真実などでは全くない。むしろ、経済学という学問の豊かな伝統に連なっている証拠ですらあるように思うのです。先述のように、黎明期の経済学者たちは、何よりも「良き社会」を探究した社会哲学者だったのですから。

経済学は社会の構造や根本を分析するに非常に鋭利なツールをいろいろ提供してくれます。そのお陰で、できることとできないことについて、明確な結論を引き出すことができる場合も少なくありません。しかるに、具体的な状況においては、こうしたできることとできないこととは、集合的な形でトレードオフを構成します。つまり、Aを優先すると、Bを犠牲にせざるを得ず、Bを優先すると…、というような形です。その場合、何をどれくらい優先すべきでしょうか。単なる個人の好みを超えて、がしかし他方で、単純な多数決ではなく、「良い社会」のあり方を指し示すことはできないでしょうか。実は、こうしたことこそ、経済学者たちが社会哲学者として長きに渡って取り組んできたことなのです。知人の思想史家によれば、現代は、「それが答えだ！」と言ってみんなを従わせることはできないけれど、「みんな違ってそれでいい」なんて言ったら社会が成り立たない、そういう時代だそうです。もし彼の時代認識が正しいとすれば、まさに経済学を経て考え抜かれた「社会哲学」こそ今必要とされているのではないかと思うのです。